

秋たけなわ。先週土曜日（十一月十六日）、私どもの大学で講演して頂いたドナルド・キーン教授が泊まられた京都の貴船きふねあたりは、見事な紅葉の錦に包まれている。その翌朝、ご一緒に修学院の田圃道たんぼを散策したが、そこへわれわれを案内された耕作奉仕者の話によれば、今年は好天に恵まれ、お米も果物も野菜なども豊作だという。

古来、この秋より冬にかけて全国各地で行われてきたのが、収穫感謝の祭にほかならない。特に昔から稲作を主産業としてきた日本では、太陽神とも皇祖神とも仰がれる天照大神、および御饌津神みけつかみ（食物神）と信じられる豊受大神とようけに対して、早稲わせの新米を真っ先に供える「神嘗祭かんなめさい」が旧暦九月中旬（明治以降、新暦十月十六日前後）、伊勢の神宮で行われている。その上、やがて晩稲おくての収穫が終わった十一月の中下旬（明治以降、二十三日）、宮中および全国の神社などで「新嘗祭にいのみめさい」が営まれてきたのである。

しかしながら、このような収穫感謝の祭は、必ずしも日本だけのものではない。たとえば、古代中国の漢字をみても、「社」が土地の神、「稷しやく」が五穀の神で、周代の城邑じやうゆには、社と稷を祀って国家の安泰を祈った。そこで、あわせて「社稷しゃしやく」といえは天下国家を意味する。また、

天子や諸侯が収穫に感謝して、社稷の神を新穀（供饌きやうせん）で饗もてなす秋祭を「嘗じやう」（神が供饌を嘗なめる祭）という。それゆえ、わが国で古くから行われていた、カミをニエ（贄）でアエ（饗）するニエアエ（アエノコト）の祭に「神嘗」「新嘗」の漢字を宛てたのであろう。

一方、西欧でも、英国にハーベスト祭（収穫祭）、米国にサンクス・ギビング（感謝祭）などがある。特に後者は、一八六三年秋、リンカーン大統領が南北戦争の最中でも「実り多き収穫」を得られたから「十一月の最終木曜日を……天にいますわれらの恵み深き父（神）への、感謝と賛美の日として守る」ことを布告して以来、広く行われるようになった。今でも、収穫物を神に供えて感謝の祈りを捧げる、ナショナル・ホリデーの一つとされている。

翻ひるがえって、わが国では、新嘗祭の十一月二十三日が、戦後「勤労感謝の日」と称する「国民の祝日」となったけれども、今やその本義が忘れ去られつつある。ただ、関西師友協会などでは、七十年前前に安岡正篤まさひろ氏が日本農士学校で始められた「社稷祭」の伝統を承継ぎ、各々おのおの自慢の作物をもち寄り「社稷の神に感謝し……収穫の喜びを分かち合う」楽しい集いを続けている。また、誰であれ、日常の食物を、単なる食くい物（餌えさ）としてではなく、大自然の神々からの賜り物（賜たまぶ物）と感謝しながら、食前に手を合わせて「いただきます」と唱えれば、日々おのずから「嘗祭」を実践していることになるのかもしれない。

※ 今年（二〇〇四年）は、国連の定めた「国際コメ年」で、稲作・米食の重要性が世界的に再評価されつつある。